

国衙の税所の職を世襲し、常陸大掾家と姻戚関係をもつ税所氏の文書であり、とくに弘安二年（一二七九）の作田惣勘文は「常陸国太田文」（統群書類従）の原本で、常陸国衙によって作成されたものと見られ、大田文の作成、常陸の郡荘域の確定、中世村落史の好史料である。鎌倉時代、信濃の豪族であった臼田氏が、南北朝時代、常陸稲敷郡に居を移し、近世初期に百姓となる迄の波瀾に富む歴史は、「臼田文書」に伝えられている。寺院関係では、「円密院文書」があり、南北朝期以来の関東における天台宗檀那流、恵心流の教線拡大の状況、信太荘の実態を示す貴重な史料である。

その他、公武の徳政に関する重要史料を含む「常陸国総社宮文書」をはじめ、「日輪寺文書」「法雲寺文書」等についてもふれて見たいが、すでに紙数も尽きてしまった。

常陸における文書集の編纂は、江戸時代以来盛んに行なわれてきたが、現在それらは一般に写本の形で存在している。今回それが公刊され、利用し易くなったばかりか、

調査によって発見された原本によって刊行された部分の少なくないことは、本書が今日の古文書研究の最高水準に立つ文書集であることを示している。

吉田神社、薬王院等の古文書を含むと考えられる第二巻以下の続刊が、大いに鶴首されるところである。

（B5版五〇三頁 昭和四五年三月 茨城県刊 頒価三、〇〇〇円 なお申込先は水戸市三の九二丁目 県立図書館内茨城県史編さん室）（上横手雅敬）

コーンフォード著
大沼忠弘訳
左近司祥子

トウキーニューディース
—— 神話の歴史家 ——

原著は一九〇七年に刊行され、「ロハリスン女史に献呈されている。本書の意図するところは、懐疑的批判的精神が旺盛だとするトウキーニューディースに対する在来の通説的な解釈に反論することである。そのため本訳書末尾の訳者解題にもある通

り、刊行当初より学界から好意をもってはむかえられず、近年に至るもなお、本書を反駁する議論があつたと断たない。しかし、裏を返せば、それは本書の存在価値が今なお失なわれていないことを示しており、一九六五年に原著が覆刻され、今また邦訳が出たこともそれを示すものであらう。

序文によると、著者の目的はトウキーニューディースの「歴史」の「真骨頂」というべき芸術的局面を明らかにすることにある。内容は、第一部「歴史家トウキーニューディース」と第二部「神話家トウキーニューディース」とに分かれているが、もちろん、一貫した主題を追及したものである。

第一部はペロポネソス戦争原因考ともいうべきもので、著者コーンフォードはトウキーニューディースのあげている説明には満足せず、みずから原因についての仮説を立てている。すなわち以下のようなものである。戦争を意図したのは、ペリクレースの支持層の中核をなすペライエウスの新興工商業者であつて、彼らの強い要求をペリクレースはうけいれざるを得なかったの

だ。彼らは西方へ向う貿易行路がすべてコリントスを経由しているのに満足せず、メガラ地峡をアテナイの支配下におき、貿易の主導権を得て西方シケリア方面までの通路を得ることを目指している。だからアテナイにとって、攻撃の近くの目標はコリントス、遠くの目標はシケリアであるが、コリントスはメガラを通してのみ攻略し得る。そこで対メガラ強硬策とシケリア遠征とは深いつながりがある。

ざっと以上のようなコンフォードの仮説とトゥーキューディデースのいう原因とは大いにはなれているが、著者は『歴史』の第一巻は戦争勃発の原因ではなく口実を述べたに過ぎず、彼の意図は観察された行動（出来事）と申し立てられた動機（演説）とを記録することにあった、という。

第二部が序文でいうところの「芸術的局面」をとりあつたものである。すなわち、彼の詩人乃至芸術家的な天分があきらかになるのは神話的历史としての部分においてであり、そのような部分のいくつかが例示されている。その叙述を通じて著者は、

次のような結論を引き出している。トゥーキューディデースはシケリア遠征の「原因」をたずねて、第四巻から第七巻まで「原因」の連鎖がつづいていることをつきとめた。

更に遡れば第三巻までは行けようが、それ以上原因の連鎖を求めて遡ることはできない。ところで彼は一連の神話的原因の先入観念にとらわれていたために、シケリア遠征計画を戦争の起因に結びつけることができなかった。これを結びつけるには経済的状况の諸要因に気づかなければ不可能だが、トゥーキューディデースはそれに気づかなかつたのである。要するに、彼の精神が自分の目撃した事件を一定の形式にはめこんでしまうような、様々な先入観によって満たされていたので、戦争の真の起因が彼には理解できなかったのである。

（B6版三七六頁 昭和四五年二月 みすず書房刊 定価一、〇〇〇円）

（新村祐一郎）